

令和7年第14回教育委員会定例会（秘密会）

開会年月日 令和7年7月25日（金）

場 所 教育委員会室

出席者	教育委員会	教育長	三 浦 康 彰
	同	委 員	小 林 三 保
	同	委 員	仲 山 英 之
	同	委 員	岡 田 行 雄
	同	委 員	森 山 瑞 江

議 題

3 答申

- (1) 小学校特別支援学級調査委員会および中学校特別支援学級調査委員会からの教科用図書に係る答申について

会議に出席した者の職・氏名

教育振興部教育総務課長	杉 山 賢 司
同 教育指導課長	佐 藤 永 樹
同 副参事	佐 藤 勝 也
こども家庭部長	関 口 和 幸
こども家庭部子育て支援課長	脇 太 郎

3 答申

- (1) 小学校特別支援学級調査委員会および中学校特別支援学級調査委員会からの教科用図書に係る答申について

教育長

それでは、答申（１）「小学校特別支援学級調査委員会および中学校特別支援学級調査委員会からの教科用図書に係る答申について」から始める。

特別支援学級で使用する教科用図書については、義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律施行令第１５条及び学校教育法附則第９条の規定により、毎年度採択替えができることになっている。

このため、本年４月に特別支援学級教科用図書の採択に係る調査委員会を設置し、調査研究をお願いした。

それでは、小学校、中学校それぞれの調査委員会の委員長の入室をお願いする。

—椿田小学校特別支援学級調査委員会委員長 入室—

—宮田中学校特別支援学級調査委員会委員長 入室—

教育長

それでは最初に、椿田小学校特別支援学級調査委員会委員長から答申内容の説明をお願いする。

小学校特別支援学級調査委員会委員長

それでは、小学校特別支援学級教科用図書の調査研究について説明する。

令和７年４月１１日、教育委員会から諮問を受けた令和８年度使用の特別支援学級教科用図書の調査研究について、小学校特別支援学級調査委員会は本日、答申を提出する。それでは、この答申内容について説明する。

資料２－１をご覧ください。

小学校特別支援学級調査委員会は、特別支援学級を設置している１６校各校に設けられた各校研究会に対し、学校教育法附則第９条に係る図書の研究を依頼した。その後、各校研究会からの報告書等を参考に６月に会議を開催し、慎重に研究検討を行ってきた。

１枚おめくりいただき、次のページ、別紙１をご覧ください。

調査研究を行った図書数であるが、各学校からの意向を踏まえ、１４６冊の図書を調査研究した。内訳は、継続の採択候補図書１４５冊、新規の採択候補図書１冊である。各教科の冊数及び図書名等の詳細については５ページ以降に掲載しているため、後ほどお目通しいただきたい。

図書の調査研究に当たって、各校研究会の報告を参考に、児童にとって適切であるかという視点から図書の内容を整理し、調査研究した。

続いて、新規採用候補図書について説明する。３ページの別紙１を再度ご覧ください。

特別な教科、道徳は（１）の１冊である。１２という数から日本の文化である干支を意識し、十二支を理解しやすく、また、言葉と絵の内容が合っていて分かりやすくなっていた。また、イラストや色使いが児童の興味を引き、干支のほかに数字の量的概念も学ぶことができるなど、多様な場面で活用できるため、新規採択候補とした。

参考資料として、１３ページから、各校研究会の研究報告をまとめた令和８年度使用小学校特別支援学級教科用図書研究報告一覧を添付しているので、後ほどお目通しいただきたい。

続いて、２９ページ、最後のページである。別紙２をご覧いただきたい。小学校特別支援学級調査委員会の審議の経過などをお示ししている。

以上で、小学校特別支援学級調査委員会の答申説明を終わる。

教育長

続いて宮田中学校特別支援教育調査委員会委員長から答申内容の説明をお願いする。

中学校特別支援学級調査委員会委員長

それでは、中学校特別支援学級教科用図書の調査研究について説明する。

令和７年４月１１日に教育委員会から諮問を受けた令和８年度使用特別支援学級教科用図書の調査研究について、中学校特別支援学級調査委員会は本日、答申を提出する。それでは、この答申内容について説明する。

資料２－２をご覧いただきたい。

中学校特別支援学級調査委員会は、特別支援学級を設置している８校各校に設けられた研究会に対し、学校教育法附則第９条に係る図書の研究を依頼した。その後、各校研究会からの報告書等を参考に、６月に会議を開催し、慎重に研究、検討を行ってきた。

１枚おめくりいただき、次のページ、別紙１をご覧いただきたい。

調査研究を行った図書数である。各学校の意向を踏まえ、５４冊の図書を調査研究した。内訳は、継続の採択候補図書５１冊、新規の採択候補図書３冊である。各教科の冊数及び図書名等の詳細については５ページ以降に掲載している。後ほどお目通しいただきたい。

図書の調査研究に当たっては、各校研究会の報告を参考に、生徒にとって適切であるかという視点から図書の内容を整理し、調査研究した。

続いて、新規採択候補図書について説明する。３ページの別紙１を再度ご覧いただきたい。

今年度の新規採択候補図書は３冊である。それぞれについて調査研究の結果をお伝えする。

１は音楽である。イラストや図が多く用いられていて、短い小節で楽譜が示されている。音の高低を視覚的に捉えることができる。

２も音楽である。歌集である。生徒がなじんでいる最近の歌から世界の民謡まで収録数が多い。ポケット版で持ち運びしやすい。

3は道徳である。自分ごととして道徳を捉えられるように工夫されている。さらに導入の話が短く、生徒が内容を理解しやすくまとまっている。

参考資料として、11ページから各校研究会の研究報告をまとめた令和8年度使用中学校特別支援学級教科用図書研究報告書を添付している。後ほどお目通しいただきたい。

続いて17ページ、最後のページである。別紙2をご覧いただきたい。中学校特別支援学級調査委員会の審議の経過などをお示ししている。

以上で、中学校特別支援学級調査委員会の答申説明を終わる。

教育長

ただいま説明があった答申内容について、各委員からご意見、ご質問などがあればお願いします。

仲山委員

小学校を例にお伺いしたいのだが、令和6年度採択冊数が163冊で、今回は候補として145プラス1で新規が1冊入っているということであるが、既にその段階で昨年度の冊数よりも減らしたわけであるけれども、それはどのような基準で減らしたのだろうか。中学校もこれは同様である。

小学校特別支援学級調査委員会委員長

冊数が減っていることについては、各学校で児童の実態等を見ながら選んでいるが、最近、教科用図書は検定本を利用する学校が増えており、内容によって一般図書を参考図書として学校で購入しているケースが増えていることが考えられる。

また、今年度、都の調査用資料がデータ化されて現場に下りてくるのが遅くなったということも聞いているので、そういったことが影響しているのではないかと考えている。

仲山委員

既に候補の段階で163から146に減らしたわけだが、そのときにこれは候補には入れないほうが良いというような基準はどこにあったのだろうか。

小学校特別支援学級調査委員会委員長

児童の実態に応じて昨年度に候補として挙げた一般図書が今年度の子供たちに合っているのかどうかということを各学校が考えて、今年は対象となる冊数が減ったと考えている。

中学校特別支援学級調査委員会委員長

では、中学校を説明する。

簡単に言うと、前年度にどこの学校も使わなかった教科書はもう落ちている、候補の本から外れているということで、その理由は、1つはコロナが落ち着いてきて、学

校生活がかなりできるようになってきたので、そのようなところで使わなくてもいいという書籍が出てきたということは大きいと思う。

また、今年度は昨年に比べて冊数が非常に少ないというのは、やはり生徒の実態に応じた本が次第に選べてきたというか、そのところが分かってき始めたというところで、使いやすい教科書を使って子供の実態に合わせたところで指導しているということがある。

仲山委員

今度は少し細かいところなのだが、資料2-2の別紙1、3ページに相当するが、その中で音楽の教科書で調査研究内容としてというところの2つ目である。短い小節で楽譜が書かれているので、楽譜を読めなくても云々というところだけれども、私は音楽が分からないのだが、どうして小節で書かれていると楽譜を読めなくても大丈夫なのかというところを教えていただけたらと思う。

中学校特別支援学級調査委員会委員長

多くの楽譜は連続して長く書かれていて、子供たちが飽きてしまうというか、どこを読んでいるか分からなくなってしまうので、最初の4小節ぐらいが少し書いてあって、「春の小川はさらさらいくよ」程度で、それをイラストで書いてあったりすると、非常に子供たちは見やすいし、分かりやすい。それが全て書かれてしまうと、集中力も落ちてきたり、分からなくなってきたりしてしまう。そのようなところでそういった記載をさせていただいている。

教育長

読めなくてもというより、読むのが苦手などということではないか。

中学校特別支援学級調査委員会委員長

読むのが苦手でも問題ない、ということである。

森山委員

日本教育研究出版のところで小学校のところも中学のところも「ひとりだちするための」というのがよくタイトルについている。例えば、資料2-1の8ページの算数のところに『ひとりだちするための算数・数学』とあるが、この小学校の本に「ひとりだちするための」というのはどのような内容なのだろうか。

小学校特別支援学級調査委員会委員長

ご指摘いただいた日本教育研究出版の『ひとりだちするための算数・数学』についてご質問だと思う。

こちらは小学校でいうと「ひとりだちするために」というのは、主体的に自分から進んで学ぼうという意欲や、あとは自分の力で何とか解決しよう、特に算数については既習事項、今まで習ったことを使って新しいことを学ぶという教科の学習の特性

があるので、1人でも勉強できるようにするためのという意味で、このタイトルが入っていると思う。

仲山委員

資料2-2の3ページの一番下の行である。視覚的に課題のある生徒には拡大コピーをするなどの配慮が要るということだが、これはこの生徒がこの教科書を使うということが分かった段階で拡大コピーをするということによってよろしいだろうか。

中学校特別支援学級調査委員会委員長

教科書は学年単位で購入をするので、やはり見にくい子や、そのような苦手な子は基本的には教科書を拡大して見やすくする配慮をするとご理解いただければと思う。

小林委員

今の学年単位で購入ということは、この中から各学校、各学年ごとということで、全部買う必要はないということか。

中学校特別支援学級調査委員会委員長

ご指摘のとおりで、学年でまとめてという形になっている。発達のいろいろな課題を持っている子どもたちであるのだが、予算的なこともあり、なかなか全てに応じた対応ができず、この子にはこれでというわけにはいっていないというのが実態である。

仲山委員

今回のことではないのだが、全体的な特別支援教育に関するところである。難聴や言語障害などで通級指導学級であったか、それから、また特別支援教室というのもあるけれども、そこで使っている教科書というのは今回の採択には関係しない教科書だと思うのだが、どのような教科書をそこでは使っているのだろうか。

小学校特別支援学級調査委員会委員長

難聴、言語、あとは弱視、それぞれデージー教科書というものがあり、そういったものを使っている。また、特別支援教室においては自立活動を中心に学習しており、コミュニケーション能力を高めるためのいろいろな取組や活動をしているので、教科書を使わずに行うこともある。

教育長

それでは、各委員からの質問も終了したので、椿田委員長と宮田委員長には退出していただきたいと思います。

教育長

ここからは教育委員会としての審議に入る。

各委員におかれましては、こちら側の私から見て右手のテーブルに配置した特別支援

学級教科用図書の見本本を点検していただければと思う。その後、採択を行えればと思っている。

(見本本点検)